平　雅行著

『鎌倉仏教と専修念仏』

久野修義

鎌倉期の宗教社会史研究を革新し、力強く牽引してきた著者による、『日本中世の社会と仏教』（塙書房、一九九二年）に続く第二論文集である。書名だけを比較すると、一見、前著よりも対象が限定されたかにみえるが、本書の内容は決してそんなものではない。著者自身が関わってきた顕密体制論や専修念仏に関する議論をふまえ、改めて整理し、現時点での包括的な見解を示すもので、その視野は仏教思想の分野にとどまらず、広く日本の中世社会や国家の特質にまで及ぶきわめて刺激的な著作である。

構成は、「第一部　顕密体制論をめぐって」が七章、「第二部　専修念仏をめぐって」が付論を含めて六章、という二部からなり、その前後に「序章　顕密体制論の方法とその課題」と「結び　第一三章　鎌倉仏教の成立と展開」がすえられている。そして、末尾に付された「初出一覧」は、たんなる書誌情報ではなく、著者が各論考を執筆した際の経緯とその後の状況が簡潔に述べられており、本書を理解するうえで大いに手助けとなっている。

第一部の諸論考では、顕密体制論という重要学説について著者ならではの総括と展望がなされる。黒田俊雄によって一九七五年に提起された顕密体制論の画期性は周知のことだが、それゆえに、ややもすれば史学史上の古典として祀り上げられ、その壮大さゆえに敬遠されるむきもあった。そんななかにあって、著者は顕密体制論とそれに関する諸議論に真っ正面から向きあい、黒田学説に大きな影響を受けながらも、その祖述にとどまることなく、研究者として研鑽を積んできた。その奮闘ぶりが十分にうかがえる。解題原稿や書評をベースにした論考が多いこともあり論旨も明快で、松尾剛次、末木文美士、上島享らをはじめとする諸氏との議論を通して、黒田俊雄の顕密体制論にあった未整理な部分やゆらぎが剔抉され、整序されていく様がみてとれる。本書が示す総括や課題、展望は、今後に裨益するところが甚だ大であろう。ちなみに、二〇一五年春に著者が行った大阪大学最終講義「顕密体制論と私」（補訂して『史敏』一四号に掲載）は、自らの研究足跡について縦横に語っており、本書を理解するうえでもおおいに参考になる。

第二部では、鎌倉期における専修念仏の法難が思想弾圧であり、法然の思想に由来するものであったとする立場から、さまざまな異論や批判をふまえ、さらに議論を展開させている。第一部もそうであったが、本書は全体としてポレミックな性格を濃厚に持っており、とくに第二部での筆法は時に鋭く、厳しい議論が展開されている。学問的節度は保ちながらも、そこでなされる峻烈な反駁の姿勢には、著者の研究者としての強い責務、後学への熱い思いが感じ取れる。達意の文章による論点の整理と新たな見解の提示、そして実証面の成果を加えるなど、著者の研究力量がうかがえる。善鸞義絶状、『教行信証』後序、建永の法難の経緯など、いずれも重要かつ著名な事績について綿密な史料分析が施され、法難における私刑の死罪と公式の流罪との差異、専修念仏禁止令と特定個人の処罰とを区別すべきとの指摘、九条兼実や慈円の役割を加味した事実経過の再構成などなど、ほんの一例だが、多くの重要な事実発掘と事件経緯の再構成がなされている。膨大な蓄積がある教学研究の分野にも果敢に参入し、幅広く中世古文書学や史料学の知識を活かして、宗門関係史料のみならず幕府史料や公家記録なども駆使することで、研究の新局面を開いている。

そして結びとしての最終章では、顕密体制論の立場からの鎌倉仏教の歴史が包括的・通史的に叙述される。鎌倉仏教の研究には社会的機能の分析が不可欠という著者の見解が十分に活かされており、顕密体制論によって切り開かれた「歴史学的教理史」の現時点における最高の到達点といえよう。顕密仏教を「中世の生産力水準に見合った宗教であり、高度な合理性を取り込んだ呪術宗教」（四三五頁）とする指摘の含意はきわめて深い。

以上のように、本書は日本中世社会論をも射程に入れた、顕密体制論の立場からの鎌倉仏教論であり、同時にまた鎌倉仏教論を通じて顕密体制論を再定義した書といえるだろう。

本書の大きな特色はその広範な史料博捜と力強い論理性にあり、とりわけ前者については、『大系真宗史料』（法蔵館、二〇〇六年から刊行継続中）の編纂委員として「親鸞と吉水教団」を担当した成果や、長きにわたり『訳注日本史料　寺院法』（集英社、二〇一五年）制作の作業を経験したことによる裏づけがあった。そして力感溢れ情感のこもった文章は、時に学術論文集としては異例なほどで、第四章などでは、見解の相違を研究方法の背景や基盤にまで及んで説明し、著者の究極の課題は蹉跌する知識人論としての宗教者像であるとの吐露まであって、いささか感情値が高い文章もみえる（一二二～一二三頁）。しかし、これも本書の魅力であろう。こうした類例はほかにも多く、積極的に議論することで研究を進めてきた著者の姿勢をよく示す。したがって本書は、堅固な実証作業による完結した作品というよりも、ダイナミックでさらなる展開を予感させるものといえる。

鎌倉仏教を、「正統と異端」範疇を避けて「穏健改革派」「急進改革派」としたことなどは論義を呼ぶだろう。「異端は美し

き一エピソード」で歴史論たりえないとする（第七章）が、そのこと自体も含め、異端問題が登場した歴史的事実は重い。異端は正統と不可分の相対的概念でもあり、政治状況により変異するが、体制秩序と宗教が不可分であった時代を分析するためには、さらに著者なりの検討を深めてほしいと願うのは評者だけではないだろう。この微修正によって「改革派」概念が前面化したため、いっそう「改革」の内実も気になった。大学人として長く「改革」に振り回されてきただけにその思いは強い。著者も十分承知するように、仏教革新運動をいかに説くかは、なお聳え立つ大きな課題である。それに関して、鎌倉仏教改革の動きを治承・寿永の内乱で一挙に説明するかのような叙述ぶりはいささか気になった（第一三章）。内乱を加味しての考察は大いに賛成だが、その有効射程はもっと厳格にすべきではないか。法然の専修念仏帰入や文覚の神護寺復興活動などは内乱以前であるし、重源もすでに「勧進入唐三度聖人」という実績をもっていた。また少し時代がくだる日蓮や道元の登場についてもさらなる説明が必要だろう。

ともかく本書は、間違いなく黒田顕密体制論を理解する最良の手引きでもあるが、それはあくまでも著者の卓抜な総括であり、黒田顕密体制論すべてではない。著者も指摘するように、顕密体制論は先駆的業績ゆえの未整理な部分もあり、複雑であるだけに、その多様な可能性はなお残されている。「顕密体制論は多様であるはずだし、多様性を競い合うものでなければならない」（三二頁）とある通りである。したがって黒田俊雄の著作と直接格闘することは今なお不可欠であり、その作業があってこそ、著者が黒田説と格闘しつつ学問形成を遂げていった真摯な道筋や、その学問的魅力もいっそうみえてくることだろう。

（ひさの・のぶよし　岡山大学名誉教授）

（A5判、五三六ページ、九七二〇円、法蔵館、二〇一七・六刊）